

子どもの非認知能力の育みを支える実践的教育に関する 一考察

——キリスト教保育・音楽の視点から——

A Study of Practical Education Supporting the Development of Children's Non-Cognitive Skills: Perspectives on Christian Childcare and Music

國光 みどり

Midori Kunimitsu

はじめに

子どもを取り巻く社会の変化は、子ども達の育ちそのものに大きな影響を及ぼしている。子どもが育つ家庭や地域の環境、そして社会状況においても、子どもが生得的にもっている「自ら育とうとする力」が十分に醸成される時間が奪われるスピード感で進展しているのが現状である。子どもを取り巻く様々な環境が短時間で変化していく状況下で、将来如何なる社会的状況に直面しようとも、その中で一人ひとりの子どもが自己を十分に発揮し、社会との関係性を認識しながら自信をもって生き抜いていくために、そこで求められる力の基礎を支えていく質の高い乳幼児期の保育・教育が求められてきている。

現代社会における質の高い乳幼児教育のあり方の一つとして重要視されている、乳幼児期における「非認知能力」と呼ばれる数値化して図ることのできない力と、「IQの値には現れない認知的な心の性質を兼ね合わせた大切な心の力の総体」¹⁾を育むための乳幼児期の教育・保育のあり方について、主としてキリスト教保育・音楽を通じて、「自己に関わる目に見えないものを大切にする保育」に視点を置きながら考察する。

1. 乳幼児教育における「非認知能力」の定義

現代社会における乳幼児期の子ども達の育ちについては、平成27年4月から施行となった子ども・子育て支援新制度に伴い、『保育所保育指針』、『幼稚園教育要領』、『幼保連携型認定こども園教育・保育要領』の改訂の背景・経緯について、「様々な研究成果の蓄積によって、乳幼児期における自尊

心や自己制御、忍耐力といった主に社会情動的側面における育ちが、大人になってからの生活に影響を及ぼすことが明らかとなってきた。これらの知見に基づき、保育所において保育士等や他の子ども達と関わる経験やそのあり方は、乳幼児期以降も長期にわたって、様々な面で個人ひいては社会全体に大きな影響を与えるものとして、我が国はもとより国際的にもその重要性に対する認識が高まっている」²⁾としている。乳幼児期の保育・教育における人の生涯発達の土台となりうる社会情動的スキル（非認知能力）の育みについての重要性が認識することにより、IQで測定することができる認知能力とともに、乳幼児期に育みたい心の要素として、認知能力と呼ばれる数値化して測ることのできる知識や経験を活用する視点から、数値化できない力として、子ども達が複雑化する未来社会において、自らを肯定的に捉え、他者と協働して目標達成にのぞみ、個々人のもつ力やよさを認め合い、十分に自己を発揮し合いながら進むことによって、さらなる価値を見いだしていくことが可能になるのである。ここに子ども達が予測不可能な未来社会を生き抜くための基礎となる力の醸成への再認識が今求められて来ているのである。

「非認知能力」という用語は、2000年にノーベル経済学賞を受賞したシカゴ大学の教授であり経済学者のジェームス・ヘックマン（James Heckman: 1944-）により教育経済学の分野で使われ始めた言葉である。ヘックマンの「ペリー就学前プログラム（the Perry Preschool Study）」による非認知能力の育成については、幼児期に子どもの自発性を重視した質の高い教育を受けた子どもと、就学前教育を受けなかった子どもを、ヘックマン教授はその後40年間にわたり追跡調査をした。IQで測れない子ども達が社会を担う未来において、あと伸びし続ける能力の育成の重要性を主張し、経済学的に乳幼児期における教育への投資の意義とともに、乳幼児期に育むべき非認知能力の基礎を育むことの重要性を主張した。ヘックマンのプログラムは今日の日本における保育・幼児教育の方向性に大きな影響を与えることになったのである。

遠藤はヘックマンの主張であるIQで測定できる認知能力について、「心理学的に厳密に言えばIQと認知能力は似て非なるものと言えます。実のところ、先に見た社会的認知に関わる力も含め、IQの値には現れない認知的な心の性質も多々存在するのです。その意味からすれば、『非認知能力』なるものは、実は『認知能力以外の心の性質』を意味するものではありません。むしろ、それはあくまでも、IQの値の高低に現れないような種々の認知能力も含む、大切な心の総体であると受け取っておくべきでしょう」³⁾と述べ、IQと認知能力は酷似しているが同一ではなく、認知能力の中にも、心の力をなす能力が含まれていることを指摘している。言い換えるならば、非認知能力と認知能力は実際には深く絡み合っており、保育実践においては、非認知能力の育みのみを意図して行われるものではないといえる。つまり、非認知能力の育みを、認知能力に含まれる数値化できない心の性質も含め全てが「大切な心の力」であると捉え直しておきたい。そこでは、「社会情動性スキル」という学術的根拠を有した術語を用いる意義を認識しておく。

2. 非認知能力の育みの視点としての自己と社会性に関わる力

東京大学大学院教育学研究科附属発達保育実践政策学センターでは、2021年度文部科学省委託調

査の成果として「非認知能力の育ちを支える幼児教育」リーフレット、「非認知能力の育ちを支える幼児教育 園の取り組み事例集78」⁴⁾を作成している。同センターでは、そこに参加した幼稚園・認定こども園合わせて29園の園長・副園長・主幹教諭から園の取り組みに対してヒアリングを実施し、その結果、各取り組みにおける目標の観点より、「自己に関わる心の力」、「社会性に関わる心の力」の側面から捉えるとともに、「非認知能力を支える基盤」の三つの大分類と、ヒアリングからの抽出としての小分類について一覧を作成した。以下はその分類とまとめである。

表1 ヒアリングで挙げられた取り組み事例の分類

大分類	小分類（ヒアリングの語りから抽出）	
自己に関わる心の力	主体性	自発的、主体的に考え行動する力
	興味	物事に興味をもって取り組む力
	感受性	五感を通して環境から刺激を受けたり感動したりする力
	創造性	イメージを表現したり形にしたりする力
	粘り強さ	最後まであきらめずに取り組む力
	自信	物事に対して「自分ではできる」と信じる力
	思考力	目標に向かってどうすればよいか自ら考える力
社会に関わる心の力	協同性	共通の目標に向かって他者と協同する力
	思いやり	他者を助け、他者の利益のために行動する力
	社会との関わり	社会の一員として行動する力
非認知能力を支える力	アタッチメント	子どもが安心できる保育者との関係
	記録	園での子どもの育ちや経験の記録
	風土づくり	園における温かく支援的な雰囲気づくり
	研修	保育者の学びやスキルアップ

資料：「非認知能力の育ちを支える幼児教育 園の取り組み事例集78」⁴⁾

上記「事例集78」では保育実践におけるヒアリングを四つの小分類に整理している。

このような視座を念頭に、非認知能力の育みは、日本における保育内容の三つの視点である「心情・意欲・態度」として目に見えない大切な育ちとも大きく重なる部分であるといえるだろう。非認知能力は子ども達が主体となってより豊かな活動を行う中で、様々な活動や事象に探求心を燃やし、仲間と協働しながら自ら行動し、周囲の環境と関わろうとする過程において、多様な感情を経験することによって育まれていくのである。

非認知能力における「自己に関わる心の力」に分類される「自尊心」、「自己肯定感」の育みについて、キリスト教保育の視点から次に見ていきたい。何故なら、保育・幼児教育の基底を形成したキリスト教的理念は、我が国では、明治維新以後の欧化政策の中で取り入れられるようになり、現代における日本の保育施設において、すでに実践されているからである。

3. 『新キリスト教保育指針』が語るキリスト教保育とは

現代の日本における保育施設は、公立・私立の幼稚園、保育所（園）認定こども園等様々な種別

の園が地域性や保護者をもつ多様なニーズに対応しながら、多彩な保育施設が子どもをもつ家庭を支えている。

この多様な保育施設において子どもの乳幼児期の保育が行われているが、その中には、仏教やキリスト教という信仰に基づいた保育施設が存在している。では、ここで取り上げるキリスト教信仰に基づく保育施設では、如何なる宗教的理念によって保育が行われているのであろうか。

キリスト教保育について青木は、「あなたがもし、保育の中で、劣等感でふさぎ込んだり、何か失敗して落ち込んだ時、一体どうやって立ち上がるのでしょうか。自分以外の、大きく広く、あたたかい手が『そんな君が大切だ』『君はどんな姿でもかけがえのない人だ。大丈夫だよ』と支え包み込んでくれるなら、どんなピンチでも切り抜けられると思います。実はそのようにあなたの^{すべて}凡てを愛し、受け容れ、どんな時でも未来へと歩かせる〈永遠の腕^{かいな}〉をあなたに伝えようとしているのが、キリスト教の〈福音〉と呼ぶものです⁵⁾と述べ、キリスト教保育が「愛すること」に根差した保育であることに言及している。

さらに、子どもに対する価値観について、青木は「私達の側で嬉々として遊ぶあの子ども達にしても、小さく、弱く、無価値なもの、と一段低く見下げられていました。しかし、イエスの愛が現れ、それを逆転させ、彼らの生命^{いのち}に最高の尊厳性と価値を与え、かけがえのないものとなりました。(マタイ11:25以下、18:1以下)」を引用し、「フレーベルやペスタロッチをはじめ真の教育家たちはこの聖句に触発されて子どもと対峙し、世界の幼児の保育はキリスト教保育に始まって、キリスト教保育と共に歩み、発展したといっても過言ではない⁶⁾と述べ、キリスト教保育が世界の保育の原点であることに触れ、オベルラン (Jean F. Oberlin: 1740-1826)、ペスタロッチ (Johann H. Pestalozzi: 1746-1827)、フレーベル (Friedrich W. Fröbel: 1782-1852) を始め、子どもの保育、教育に積極的な働きをした人々の多くがキリスト教に生かされた人々であったことに言及している。

キリスト教信仰による保育を掲げる保育施設が、我が国の保育施設として存在する意義がまさに上記の点にあるといえよう。

4. キリスト教保育としての人間理解

『新キリスト教保育指針』(2010)の「はじめに」に言及されている保育におけるキリスト教信仰及び、人間の成長について考えることを通して、なぜ私達の保育がキリスト教保育であることを大切にするのかについて述べてみたい。

この「はじめに」には「聖書は、私たちがキリスト教信仰者・未信仰者に関わらず、人間の生き方の本質に関わる問いを投げかける。キリスト教信仰を私たちの問いとして受け止めることによって、私たちの保育は何を目指すのかについて思いを深めたいと願っている。」⁶⁾と述べられている。キリスト教保育の根幹である『聖書』が語る人間理解の本質と、キリスト教信仰としての保育が目指すべき保育を含む「人を育てる働き」はその人間理解のあり方に深い関わりがあるといえる。

(1) イエス・キリストの人間理解

キリスト教信仰において、人間が神に創造された存在であることが記されているのは周知の事で

あろう。そこで、旧約聖書の最初に記されている「創世記」に触れながら、人間存在のキリスト教的意義について若干言及しておきたい。

「神は人をご自身のかたちとして創造された。神のかたちとして人を創造し、男と女に彼らを創造された。(創世記：1：27)」⁷⁾

古代社会における支配者は王や神をかたどった像であると理解されていた。旧約聖書では地位や権力をもたない大人、子ども全ての人間一人ひとりが神によって創造された、尊い存在であり、神の前で平等であると述べられている。

「神である主は人を連れて来て、エデンの園に置きそこを耕させ、また守らせた。(創世記：2：15)」⁸⁾

また、人としての使命は神が創造された世界を神が「よし」とされる方法で、この世界を「治めよ」と命令されたのである。言い換えれば、「人間には神に似た愛と知恵が与えられていたからであらう。(中略)『神に創られたものとしての謙虚さと、神に似た愛と知恵をもって自然を管理する使命感』をもつことではないだろうか」⁹⁾と理解することができる。

しかし、旧約聖書では、神に創造された人間が、神から本来委ねられている使命を忘れ、神の意思や愛を忘れて自分勝手な道を生きる人間の罪の姿をイスラエルの歴史に落とし込みながら記されている。神はそのような人間の罪をいとうことなく、イスラエルを愛され、神に愛され応えた人々が豊かな社会や歴史を形成していくことを求めているのである。

キリスト教保育において、「旧約聖書は子どもを神からの祝福のしるしとして受け止め、その子どもたちが神の招きに応じて『あなたは心を尽くし命を尽くし、力を尽くしてあなたの神、主を愛しなさい』(申命記6：5)」¹⁰⁾という教えを受け止めるものとして、また、「(前略)あなたの隣人を自分自身のように愛しなさい。(レビ記：19：18)」¹¹⁾に記されている自分自身を愛するように隣人を愛するとはどのように理解するかについて、先ず自分自身を愛することが最高の愛とされている。自らを愛する最高の愛をもって自分に関わる全ての人々を慈しみ愛することができる人に育つように、という神の意志は、非認知能力「社会性に関わる心の力」の育みに通じるものと考えられる。子ども達が神の招きに応えるものとして育てる営みは保護者と保育者の協働的なものとして果たすべき責任であり、配慮であるといえよう。

子どもが、神に愛されている自分を知ることにより、神の愛に応答して生きるものとなり、他者もまた神の愛される存在であることに気付き、よき隣人として生活できるようになることである。

(2) イエス・キリストの子ども理解

子どもの未熟さにより、ある年齢になるまでは大人との集いに加わることができない、というのがキリストの生きた時代の習慣であった。イエスが語るところには常に子ども達も加わっていた。弟子たちは子ども達の声や行動でイエスの話を妨げる存在として捉えていたのであろう。弟子たちの子どもに対する姿勢は当時に限らず現在でも散見されるものである。しかし、イエスはそのような姿勢を示す弟子たちに憤り、子ども達を自分の方に呼び寄せられた。イエスは、子ども達はまだ律法について無知であるという当時の理解には従わず、子ども達こそが、神の国にもっとも近い存

在なのであると説いたのである。そして、イエスは子ども達に手を置き祝福された。イエスが子ども達に示す神の愛こそが、今日におけるキリスト教保育の方向性であるといえる。

「さて、イエスに触れていただくこと、人々が子どもたちを連れて来た。ところが弟子たちは彼らを叱った。イエスはそれを見て、憤って弟子たちに言われた。子ども達をわたしのところに来させなさい。邪魔してはいけません。神はこのような者たちのものなのです。まことにあなたがたに言います。子どものように神の国を受け入れるものでなければ、決してそこに入ることはできません。(マルコによる福音書10:13-16)」¹²⁾

神は人が未熟であるか否かで人を選別することはなくその存在そのものをあるがままに受け入れる方であることを示している。このことに関して、イエスの立ち居振る舞いを描いた聖句にも示されている。

小見は『『小さく貧しい者』が祝福され、そのまま全面肯定され、受容される共同体こそが地上における神の国の実践・実現であると述べていると解釈する時、そこにイエスの示す神の恵みにある人間の生き方・人間観があらわれてくる。子どもに関するイエスの教えは、キリスト教保育の今日的使命、方向性を宣明しているのである』¹³⁾と述べ、子どもこそが愛されるべき存在であることを示唆し、イエスの愛を現代社会の保育の場面で具現化するべき方向性を指摘している。子ども達が自分の存在全てを愛され受容されることで神の愛を経験することが、非認知能力である「自己に関わる心の力」を豊かに育み自己肯定感・自尊感情が育まれる営みとなることを言及している。

5. キリスト教保育と保育唱歌

キリスト教保育について、明治から昭和時代に、その先導的役割を果たし、それを実践したのがアメリカ人 A. L. ハウ (Hawe, Annie L: 1852-1943) であった。ハウは、1887年 (明治20)12月25日アメリカ合衆国最初の海外伝道組織であるアメリカン・ボード (American Board of Commissioners for Foreign Missions) の宣教師として横浜に上陸し、当時の開港地であった神戸に向かい、その地のステーション宣教師団と神戸キリスト教青年会 (WMCA) が共同で開校した神戸英語学校で英語とピアノを教えた。また、個人的な教会オルガニストとしての活動を行っていた。当時の神戸には、ハウ来日の時期に開園した私立兵庫幼稚園と私立神戸幼稚園があり、幼稚園教育を始めていた。ハウはその教師たちのためにフレーベルの教育遊具 (恩物) の指導や幼児の歌を紹介した。ハウが展開したフレーベリズムは、形式、理論そして方法の紹介だけでなく、フレーベルのキリスト教への深い信仰に基づく教育理念も伝えられたのである。

このようなハウの幼稚園教育では、保育の目的として以下の5項目が掲げられた。¹⁴⁾

- ①自然界における神の働きに対し、敬虔な愛と賛美の念を起こさせ、神への信仰を喚起すること。
- ②よいお話や教材、ことに聖書の話を通して子どもの想像力を豊かに育てること。
- ③神から与えられた賜物である音楽に対する真の感情を養うこと。
- ④世界の人類は互いに兄弟姉妹であり、互いに助け合う責任があることを心と脳裡にしみ込ませること。

⑤生涯を善良で正しく過ごせるようによい習慣を奨励すること。

来日後2年を経過した1889年(明治22)にハウは、自らの音楽的素養に基づき、日本最初の伴奏楽譜をもつ『幼稚園唱歌』を出版することになる。ハウはフレーベルの教育思想に基づいた保育を理想としていたことは先述したが、この『幼稚園唱歌』においてもフレーベルの教育思想の影響を見いだすことができる。

西海は幼稚園唱歌の例言の中でハウが述べている言葉を現代語訳し、次のように要約している。「本書は幼児向きの曲を無秩序に並べた曲集ではなく、歌は用途別に分類され、それぞれに教育的意図をもつことだ。『幼稚園唱歌』の例言には、歌は季節や目的に合わせて選ぶことの重要性と共に、『指遊の歌は指を柔らかくし、家族関係を意識させるため』、『五官の歌は聡明なる聴力、鋭敏なる味覚や嗅覚を発達させるため』、『輪遊びの歌は身体を発達させ、秩序を教え他人を思いやる心を養うため』、『日光、雨、雪、日、月、星、の歌は、子どもの観察力をこれらの現象に引きつけるため』等。テーマごとに教育的意図が明確に示されている。」¹⁵⁾ このように、それぞれの歌遊びに教育的意図をもたせ、子ども達が五感を働かせながら遊ぶという身体的な動きを伴う遊び歌が、子どもの感性や心身の成長発達に大きく働きかけるように配慮されていると言えよう。

ハウが理想としていたフレーベルの教育思想に基づいた保育が象徴されているフレーベルの歌に込められた教育的意図について『母の歌と愛撫の歌』から〈塔の風見〉を例に挙げ、フレーベル自身による解説を西海は、次のように記している。

「目に見えないただの風のようなものでも、力が合わさって大きくなれば、たとい目に見えなくとも大小さまざまなことを引き起こすことができるのです。子どもよ、この世の中には、こういうふうに、感ずることができても、目に見えないものがたくさんあるものですよ。(中略) やがて、そのうちに、その力そのものをみることはできなくても、その力がどこからくるのか、おまえにもだんだんわかるようになるでしょう。ここでは四肢の訓練に止まらず、風という自然現象に子どもの意識を向けさせると共に、目には見えない現象に想像を働かせ、それが生じる背景に神の存在認識をも子どもに感じとらせようとしている。フレーベルは〈塔の風見〉という歌を伴った遊びの中に、四肢の訓練という直接的かつ具体的な教育目標から自然や神の存在までも予感させるという深遠な教育的意図をも包括させているのである。」¹⁶⁾ このように、ハウの『幼稚園唱歌』には子ども達が自然に対して畏敬の念をもち、神の存在を自然の中に感じることができるよう深い教育的意図を含ませていると考えられる。この時期に作成された『幼稚園唱歌』はフレーベルがこよなく愛した子ども達に対するキリスト教的教育思想を具現化したものであるといえるだろう。

このようにハウの保育の目的であった「神から与えられた賜物である音楽に対する真の感情を養うこと」については、『幼稚園唱歌』を通した音楽教育の中に見るキリスト教保育の中に、神から与えられた賜物である自然現象を音楽や遊戯によって、子どもが目に見えないものを鋭敏な感覚で感じ取り、その背後に神の存在を意識できる保育や幼稚園教育が見出せるのである。感性的体験の重要性を認識すること、そしてそれを引き出すことの意義を保育者が十分に理解し、個々の感性を引き出すことこそ、非認知能力の醸成に繋がっていくと考えられる。

おわりに

ナミュール・ノートルダム修道女会修道女であり、岡山県ノートルダム清心女子大学学長であった教育学者渡辺和子（1927-2016）は「自己に関わる心の力」である自己肯定感・自尊感情を次のように述べている。「自分を愛するというのは、条件抜きに、どんな自分でも価値あるものとして大切にすることなのです。ちょうど神様が、どんな人間の上にも太陽をのぼらせ、雨を降らせてくださるように、気に入る自分にも気に入らない自分にも同じように接してゆくことなのです。また、自分を甘やかすことでもなく、かばう事とも違います。きたないところ、みにくいところを持った自分、もしかしたら身体中傷だらけの自分から目をそむけず、それらを否定せずに、むしろ傷口に『きたないね』と言いながらやさしく包帯を巻いてやれるということなのです。（中略）このように自分の傷に包帯の巻ける人のみが、他人の傷からも目をそむけることなく手当することがつまり他人を愛することができるのです。』¹⁷⁾ このような主張はキリストの福音と深く結びついており、神の慈愛が全ての人間に浸透していることを示している。とりわけ子ども達が自分を信じ、自分を愛することによって他者を愛し、共にこの社会を力強く生き抜いていくために、「条件抜きの愛で愛されている」という心情に確信をもって生きることの可能性が拓かれていくのである。

キリスト教保育を通じて、子ども達が神に愛されていることを実感し、子どもの揺るぎない「自己と社会に関わる心の力」である非認知能力の重要性について考察してきた。

十二使徒の一人であるパウロが「イエスに従って生きる」¹⁸⁾と語っているように、永続的な信仰と希望と愛、という三つの要素が保育の中でも活かされることが求められるのである。中でも「愛」が最も重要であるとパウロは説いている。フレーベルが深くキリスト教精神と結びつき、幼児教育を切り拓いたことは周知のことであるが、その背景には「信仰」、「希望」、「愛」があったとことを考えれば、この三つの言葉の重要性は不可欠であり、当然のことであった。それ故に、キリスト教保育の中で、この三つの要素を常に念頭に置きながら子どもの内なる心を育むことの意義が、今以上に認識され、それに基づき創造的に保育に関わる事が今後の課題として探求されていく必要があるだろう。

引用文献

- 1) 遠藤利彦. (2022). 非認知能力なるものの発達と教育. 発達. 170. 2 : ミネルヴァ書房.
- 2) 厚生労働省. (2018). 保育所保育指針解説 (pp.3-4) : フレーベル館.
- 3) 遠藤利彦. (2022). 前掲書. (pp.2-4).
- 4) 野澤洋子. (2022). 非認知能力の育ちを支える幼児教育. 発達. 170. 11 : ミネルヴァ書房.
- 5) 青木敬和. (1988). 新・キリスト教保育者必携. (p.9) : (社)キリスト教保育連盟.
- 6) 青木敬和. (1988) 前掲書. (p.9).
- 7) 新日本聖書刊行会. (2017). 聖書新改訳 : 旧約. 創世記 1 章27節. (p.2) : いのちのことば社.

- 8) 新日本聖書刊行会. (2017). 前掲書. *旧約創世記1章-27節*. (p3).
- 9) 三浦綾子. (1974). *旧約聖書入門光と愛を求めて* (p.17): 光文社.
- 10) 新日本聖書刊行会. (2017). *聖書新改訳: 旧約. 申命記6章5節*. (p.325): いのちのことば社.
- 11) 新日本聖書刊行会. (2017). 前掲書. *旧約. レビ記19章18節*. (p.212).
- 12) 新日本聖書刊行会. (2017). 前掲書. *新約. マルコの福音書10章13節-16節*. (p.87).
- 13) 小見のぞみ. (2021). *キリスト教保育とは何か: その子ども観と保育理論*. (p.15): 聖和短期大学紀要.
- 14) 西海聡子. (2016). A. L. ハウによる『幼稚園唱歌』の出版. *東京家政大学紀要*. 1. 人文社会学56, 24.
- 15) 西海聡子. (2016). 前掲書. (p.24).
- 16) 西海聡子. (2016). 前掲書. (p.24).
- 17) 渡辺和子. (1992). *心に愛がなければ: PHP文庫: PHP研究所*.
- 18) 新日本聖書刊行会. (2017). *聖書新改訳: 新約. コリント人への手紙第一. 13章13節*. (p.346): いのちのことば社.

参考文献

- 遠藤利彦. (2022). 非認知能力なるものの発達と教育. *発達*. 170. 2: ミネルヴァ書房.
- Hawe, A. L. (1892). *幼稚園唱歌*. (大和田建樹・松山高吉. 校閲): 福音社.
- 一般社団法人キリスト教保育連盟. (2010). *新キリスト教保育指針*: (社)キリスト教保育連盟.
- 一般社団法人キリスト教保育連盟. (1985). *キリスト教保育者必携*: (社)キリスト教保育連盟.
- 厚生労働省(編). (2018). *保育所保育指針解説*: フレーベル館.
- 野澤祥子. (2022). 非認知の育ちを支える保育・幼児教育. *発達*. 170: ミネルヴァ書房.
- 新日本聖書刊行会. (2017). *聖書新改訳: いのちのことば社*.
- 渡辺和子. (2003). *目には見えないけれど大切なもの*. *PHP文庫: PHP研究所*.

